

---

# 魔法先生ネギま～猛犬を継ぐ者～

語り部

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま〜猛犬を継ぐ者〜

### 【Nコード】

N4782P

### 【作者名】

語り部

### 【あらすじ】

テンプレな展開で死んだ少年は太陽神の力で異世界に転生する。

手にしたのは紅き槍、受け継いだのは騎士の魂。

今、新たな猛犬の伝説が始まる。

\*8月1日キーワード追加しました。

## プロローグ

「どこだ？ここは？」

少年が目を覚ますとそこは真っ白な空間だった。少年は辺りを見回すがなにもない。

「確か俺は…… f a t e のゲームやって……凜ルートクリアしてから買い物に出て……」

少年は順々に記憶を辿っていく。するとすぐに結論に辿り着いた。

「……そうだ。車が突っ込んできたんだ」

つまり彼は車に撥ねられて死んだのだ。なんともテンプレな展開である。

「マジでか……まだヘブンスフィールドルートクリアしてないのに」

「ちょっといいかな？」

「んあ？」

少年が声をかけられたほうを見ると白い髪に赤い瞳の白い服を着た少女が立っていた。

「イリア……スフィール……？」

そこに立っていたのは f a t e に登場するイリアスフィール・フォ

ン・アインツベルンそっくりの少女だった。

「ちょっと違うね。私はルー。人は太陽神ルーって呼ぶよ。ちなみに言っておくと男だよ」

「え?」

どうやら少年は見た目から女だと思っていたらしい。

「あははは！想像通りの反応だね」

「……で、その太陽神が俺に何のようで?」

もはや目の前の男の娘が太陽神ルーを名乗ったのはスルーしようと思っただけらしい。

「あ、そうだった。実はね、今回のあなたの死は予定外なんだ」

「へ?」

ルーの言葉に少年は眼を丸くする。

「え〜と、それって俺はどうなるんで?」

「ん〜、こーいう場合はどこか他の世界に転生させるのが普通なんだけどね」

「もとの世界で生き返るってのは?」

「身体が残ってればとにかく……『アレ』じゃあ……ねえ?」

「?どういうことだ?」

少年が聞き返すとルーは言いにくそうに口を開く。

「実はあなたの身体、車に撥ねられたあと、鉄骨が縦に落ちてきて  
……あなたの身体、ミンチになってるの」

「マジでか……」

「マジだよ。だからあなたを転生させようと思ってね。行き先はあなたたちの世界で言うネギまの世界だよ」

「一応聞くけど何でその世界?」

「私が好きだから」

「……ふざけんなあああああ!」

ルーの言葉を聞き、少年が激昂する。

「あれ?あなたネギま読んでたよね?」

「読んでるさ!けど俺はあの野菜坊主は嫌いなんだ!」

「じゃあネギの味方にならなきゃ良いじゃないか」

「……え?それいいの?」

「いいよ。好きに原作ブレイクしちゃいなさい。なんならフェイト

側に着いても良いし」

「じゃあいつか」

軽い……

「さて、それで能力だけどうする？ギルガメッシュの宝具に全部真名開放できるようにしようか？」

「いや……手に入れる能力は決まってる」

そう言うと少年はルーに耳打ちする。

「……それで良いの？確かにネギまの世界なら無双できるけどアーチヤーやギルガメッシュじゃなくて」

「俺はそれが1番好きなの」

「……ふう、わかったよ。じゃあ、はい」

すると少年の前に1つの扉が現れた。

「この先にあなたの師匠がいるわ」

「師匠？すぐ行くんじゃないか？」

「いくら能力を手に入れてもその使い方をしっかり学ばなきゃダメでしょ。私は能力や武器はあげられるけど技術は無理だよ」

「あゝ、なるほど」

少年は扉に手をかける。

「言っておくけどあなたが望んだのはさっきの能力だけだから不老不死とかにはなっていないよ？時間軸はとりあえず原作の2 - Aと同年代にしておくからね」

「了解。じゃあな」

そして少年は扉の向こうに消えていった。

**第1話 修行終了、そして旅立ち（前書き）**

早くも修行終わりで魔法世界に行きます。

## 第1話 修行終了、そして旅立ち

（SIDE：????）

俺はレント。前回、ルーの予定外で死んだ所謂転生者だ。ちなみにレントってのは俺の新しい名前。俺の姿が生前と変わってたからこの際に名前も変えた。

今まで俺はルーに貰った能力と武器を使いこなすために師匠のもとで修行をしていた。していたというのは今、ようやく修行の全行程が修了し、ネギまの世界に行くのだ。

この世界は時間の概念が無く、死にもしない修行のための空間だ。そのため、師匠には何度も殺されたけど。ちなみに普通の時間に換算したら数十年は経っていると思う。

「おい、なにやってんだ？」

師匠が俺に声をかける。ちなみに俺の姿は簡単に言ったりリカルなのはのエリオを髪の色を青に、瞳を赤くして成長させた姿だ。そして髪は腰辺りまでの長さがあり、それを後ろで縛っている。

「んじゃま、これで修行は終わりだ。向こうに言ってもがんばんな  
2代目」

えらく軽い感じだが師匠はいつもこんな感じだ。2代目ってのは俺が師匠の異名を継ぐことを許してくれたから。そして俺はずっと考えていたことを聞いてみる。

「師匠、頼みがあるんですけど……」

「あん？いつたいなんだよ？」

「師匠の名前を俺のファミリネームにしても良いですか？」

そう、これが俺が考えていたこと。俺は師匠の異名を継ぐと決めたときに修行が終わったら頼んでみようと思っていた。

「へっ、別に構わねえよ。どうせもう会うこともねえからな」

「ありがとうございます」

そしてついに別れのとかが訪れる。そこにあるのはここに来たときと同じ扉。

「じゃあ……頑張れよ。レント・クー・フリーン」

わざわざ俺の名前にファミリネームをつけて師匠が俺を呼ぶ。

「はい。ありがとうございます」

このファミリネームでわかるとおり俺の師匠……青い髪に青いボディアーマーの男性。f a t eで兄貴と呼ばれたランサーこと、クー・フリーンだ。これで解るとおり俺がルーから貰ったのは師匠と同じ能力と宝具だった。ただその使い方を学ぶために師匠に教えてもらっていたわけだが……

そして俺は扉の向こうに消えていった……

のは良いんだが……俺のいる場所は恐らく魔法世界。何故か？  
目の前に明らかに旧世界にいない魔法生物が歩き回っているから  
だ。これは別にいい。ただ、わからないのは……

「なんで身体年齢が6歳なんだ~~~~~」

そう、俺の身体は修行していたときよりもさらに縮み、6歳まで若  
返っていた。ルーは2-Aと同年代にするって言ったから原作開  
始まで8年はある。まあ身体能力は変わらないから良いけど……

「でも、ギルドを立ち上げるには良いか。闘技場で名を上げるのも面白そうだな」

うん……どうにも師匠譲りでバトルマニアになってきたな。ま、いいか。

## 第2話 麻帆良、運命の出会い（前書き）

かなり飛びました。主人公の麻帆良入学です。

それと感想に書かれてあったことですが、レントがファミリーネームを『クーフリーン』とランサーの真名の『クー・フリーン』を繋げて名乗っているのは『クー・フリーン』とは『クランの猛犬』を意味する名前のため、『クー』や『フリーン』だけだと『クランの猛犬』という意味にならないからです。

穴だらけの駄文ですがよろしくお願いします。

## 第2話 麻帆良、運命の出会い

（SIDE：LENTO）

やあ皆さんこんにちわ。レント・クー・フリーンです。アレから早いもので7年が過ぎ、俺は13歳の中学生になりました。

……え？時間飛びすぎ？だってこの7年間特に語る事が無いんだもの。まあ魔法世界では有名になりましたよ？闘技場で何でも勝ってましたから。でもやっぱりこの身体超ハイスペックだわ。っていうか師匠と修行してたときは気付かなかったけど特にスピードがパネエ。流石は最速の英霊、闘技場の連中の動きが止まって見えた。ラカンでも出てきてくれれば面白かったんだろうけど7年やってて1回も戦わなかった。

ちなみに自分で『クランの猛犬』を名乗ってたから向こうでの俺の異名に『クランの猛犬』を定着させることに成功した。もともと、実際は2代目だが。他にも『神速の槍兵』『青い雷』とも呼ばれているが1番メジャーなのは『クランの猛犬』だ。そんなに勝ち続けてたらファンクラブもできた。

あとはギルドを立ち上げた。ギルド名は『赤枝の騎士団』。人数はそれほどでもないがその代わりかなり個性的な連中が多い。主にマッドとかバトルマニアとかロリコンとか……アレ？ホントにろくな奴がいねえ。まあ、そんなんでも腕は確かだけだな。『赤枝の騎士団』のほうもそれなりに有名になっている。

いやもうホント語る事が無い。騎士団員を集めてたのも基本的に俺が敵で戦って強かった奴を勧誘してっただけだし。中には犯罪組織に雇われてた奴もいたけど。主にマッドとか……

そして俺は折角だから中学生になる年齢に合わせて留学生として麻帆良に留学してきた。もちろん出身国はアイルランドにした。一応一般生徒としての留学だが魔法世界で有名になりすぎたためにすぐに気付かれるかもしれない。もつとも、エヴァンジェリンとかならとにかく麻帆良の連中に協力する気は無い。一部には話のわかるものいるかもしれないがその自称『正義の味方』はアーチャーを知ってる俺にはどうやっても好きになれない。魔法世界では俺も何人も人を殺した。だからこそ魔法が人を傷つけ、殺す力であることを認識できていないあいつらは好きになれない。といっても奴らの手に負えない敵が来たら対処はするけどな。さすがに一般生徒に危害が及ぶのは気分悪いし。

とりあえず麻帆良に着いたらエヴァンジェリンと接触する。うちの騎士団の馬鹿マッドにも呪いのことで相談はしてあるしな。あとは悠々自適に学生生活を楽しむ。やっぱり学生生活は楽しまないかね。

「ふあ〜」

俺は今、ストリートバスケのコートにいる。実は俺は転生する前はバスケをしていたのだ。しかし麻帆良にこんなコートもあつたのに驚いた。でもおかげで高校や大学のバスケ部の人たちとも勝負できる。身体能力が上がってるからか同年代じゃ相手にならないんだよな。それで俺はカンを取り戻すために早朝の自主練中。さすがに修行期間も入れて数十年触ってないとカンも鈍るしな。今は4月だから朝は結構暖かい。

「ふっ」

俺の放ったスリーポイントはそのままゴールに突き刺さる。さらに相手を想定し、ドリブルで抜く。

ガチャ

そして俺がレイアップでゴールを決めるとコートを囲っているフェンスの扉が開けられた音が聞こえる。

「ん？」

その方向を見るとそこには黒い髪に右側で髪を縛っている少女がいた。ってというか顔知ってるんだけど。だって原作キャラだし。

「あ、え」と

む、困惑してる。まあ見た目外人だししょうがないか。この時期は中1だしさすがに率先して声かけたりはできないか。………ちよつとからかってみるか。

「ジエアグウィチエルモジン」

「え？ええ！ど、どこの言葉!？」

ああ、慌てる。面白い。ちなみに『ジエアグウィチエルモジン』とはアイルランド語で『おはよう』という意味だ。出身国をアイルランドにするに当たって勉強しておいた。

「ぶ……くくくく……」

その慌て振りが面白くて俺は必死に笑いを堪える。そうしてる間にも女の子は慌てる。大方英語で話すものだと思っただろう。



そして最初のオフエンスは明石。明石はボールを持つと腰を低くして構える。それだけで上手いであろう事がよくわかる。まあ、中学生では……だが。

「よし！」

明石がドリブルで抜こうとするが俺はすぐに手を伸ばし、ボールを弾く。そしてそのままボールをキープした。

「うわーうま！」

簡単にボールを取られたことに驚く明石。そして今度は俺のオフエンス。俺は腰を落として両手で交互にドリブルをし、走り出す。

「いかせな……い!？」

最初に入れた左のフェイントに引っかからず、右に抜かれると思ったのかその方向に手を伸ばす。だが俺はそこからさらに左に切り返し、そのままダンクを決めた。

「……………」

それを見た明石は呆然としている。まあ、中学生でダンクなんて滅多に無いからな。

「す、すごい！よし、もういつちょう！」

だがすぐに眼を輝かせて勝負を挑んでくる。俺も楽しくなり、そのまま相手をする。

結局明石は俺を止められず、攻撃は全て防がれた。そして俺が9本  
決め、次の10本目を決めれば俺の勝ちになるオフエンス。

「せめて1本は止めるよ!」

凄く楽しそうな明石。むう……少し意地悪しなくなった。

「じゃあ……行くぜ!」

「来い!」

「よっと」

「へ?」

明石が素っ頓狂な声を出す。それもそのはず。俺はその場、オフエ  
ンスの開始地点からスリーポイントを撃つたのだ。さっきまでドラ  
イブばかりだったから明石は反応できず、そのまま……

スパッ

ゴールネットを揺らした。

「俺の勝ち」

「ずるっ! ちょっとせいよ!」

「油断大敵だ。精進しろ」

そうはいうものの納得してない表情。そりゃそうだ。こんなんやられたほうは納得できんだろう。おっと、そろそろ帰らないと遅刻するな。

「もうそろそろ時間もやばいから俺はもう行くぜ。じゃあな、明石」

「裕奈でいいよ」

「ん？」

「だから、裕奈でいいってば。私もレントって呼ぶから。……で、また勝負してくれるかじゃ？」

「別に良いぜ。じゃ、またな」

そう言うと俺は裕奈と別れ、いったん寮に戻っていった。

このとき、俺はこの裕奈と長い付き合いになるとは予想していなかった。



## 第2話 麻帆良、運命の出会い（後書き）

というわけで第3話でした。見てわかるように本小説のヒロインは裕奈です。ネギまで一番好きなキャラなので……

## 主人公設定（前書き）

主人公の設定です。そのまんまです。

## 主人公設定

名前：レント・クー・フリーリン

年齢：現在・13歳

原作開始時・14歳

容姿：外見はリリカルなのはのエリオ・モンディアルを成長させた姿。ただし髪の色は青で腰辺りまでの長髪を後ろで縛っている。また、瞳の色は赤。

能力（f a t e調）

筋力：C 耐久：E 敏捷：A 魔力：C 幸運：D 宝具：B

対魔力：C 戦闘続行：A 仕切り直し：B ルーン：B 矢よけ

の加護：B 神性：B

宝具：刺し穿つ死棘の槍、ガイ・ホルク突き穿つ死翔の槍ガイ・ホルク

詳細：事故死からのテンプレ転生を果たした主人公。転生の際に最も好きなキャラクターであるf a t eのランサー（クー・フリーリン）の能力を手に入れた。

だがあくまで能力を手に入れただけなので使いこなすために時間の止まった空間で本家のランサーに扱かれていた。

外見が変わった際に名前もレントと改名し、修行終了時に師であるランサーの真名の『クー・フリーリン』をファミリーネームにした。

また、ランサーから『クランの猛犬』を継ぐことも許されている。

本来、ランサーの真名『クー・フリーリン』は『クー』が名前で『フ

「リン」がファミリネームだがこれをこの名前は名前と苗字を合わせ「クー・フリーン」で「クランの猛犬」という意味になり、これをどっかだけにすると「クランの猛犬」という意味にならないためレントは「クー」をミドルネーム、「フリーン」をファミリネームにしている。

修行終了後、身体年齢を6歳に戻されて魔法世界にやってきた。それから7年近く闘技場で戦ったり賞金稼ぎをしたりしながら過ごしている。闘技場では「クランの猛犬」の名前を広めることに成功した。他にも「神速の槍兵」「青い雷」と呼ばれている。

7年間闘技場で戦っていたにもかかわらず赤き翼のジャック・ラカ<sup>アラルブラ</sup>ンと戦うことができなかった。

数年前にギルド「赤枝の騎士団」を結成。現在、人数はレント含め7人しかないが実力者揃い。ただし癖の強いメンバーが多く、理由としてはレントが実力者で気が合った相手や気に入った相手を片っ端から勧誘しているから。

13歳になったのを機に学生生活を楽しむべく麻帆良学園男子中等部にアイルランドからの留学生としてやってきた。一応一般生徒としての留学だが魔法世界で有名になったため、ばれるのは覚悟している。だが麻帆良の魔法使いには協力する気は無い。

元々の性格に加え、ランサーと長く一緒に居たことからランサーに似ている部分が多い。

ファンクラブも存在し、前述の性格から女性会員は勿論男性会員も結構な人数があり、一部では「兄貴」と呼ばれている。

現在、身体年齢が13歳のため、本家ランサーよりも筋力と耐久が1ランク低くなっている。



### 第3話 新たな仲間、闇の福音（前書き）

うむ。ちょっと展開が速すぎたかもしれない……

駄文ですがよろしくお願いします。

### 第3話 新たな仲間、闇の福音

裕奈との出会いから2週間。レントは自分の部屋である準備を行っていた。レントの部屋は一見普通だが棚にはいくつかの魔法具が置かれている。もっとも傍目には置物やアクセサリにしか見えないが。

「っと、これで準備完了だな」

レントはそこから魔法具と魔法薬を1つずつ出し、さらに灰色のローブを纏う。このローブには強力な認識障害の術式が組み込まれており、本来は重要な場所への潜入用に『赤枝の騎士団』のマッドが作ったものである。

荷物を纏め終わったレントは窓から寮の屋根に上る。すでに時間は夜になり、空には綺麗な三日月が輝いている。

「さて、じゃあ行きますか」

レントはそんな夜の街を疾走する。目指すのは1軒のログハウス。そこに住む魔法使いこそが彼の目的だ。

「うおっと」

街を走るレントはとっさに身を隠す。そこにいたのは麻帆良の魔法先生だった。暗いためよくは見えないがレントは気配を消し、その場を離れる。今のところ麻帆良にばれた様子はないが、いつばれるとも限らない。それでもできるだけばれないように行動しているのだ。

「っと、確かこつちだったな」

ここ数日で調べた道順を確認しながら目的地へと向かう。

「しっかし、ホントに無駄に広いな。ここまででかくする必要あるか？」

いろいろと浮かぶ疑問を口にしながら街を駆け抜け、ついに目的地に到着した。目の前にあるのは1軒のログハウス。レントはその扉の前に立ち、ドアをノックした。

ちょうどその頃、ログハウスの中では家の主、エヴァンジェリンがいた。

「まったく、じじいも人使いが荒い。私をなんだと思っているんだ」  
エヴァンジェリンはちょうどこの辺りの見回りから戻ってきたところであり、今は従者である茶々丸が淹れたお茶を飲んでいる。

コンコン

「む?」

突然聞こえたドアをノックする音にエヴァンジェリンは怪訝な視線をドアに向ける。こんな時間に来客の予定などない。そもそもこの学園で彼女に友好的なものなどほとんどいないのだ。

「どちらさまですか?」

するとエヴァンジェリンの従者の茶々丸がドアを開ける。彼女は無表情だが油断は一切していない。そしてドアを空けた向こうにいたのは灰色のローブを纏った1人の男だった。彼はローブで顔は見えないがその歩き方から只者でないことは茶々丸にも、そしてそれを後ろから見ているエヴァンジェリンにも理解できた。

「何者だ貴様?」

男の姿を見たエヴァンジェリンは殺気を飛ばす。

「アンタに用があつてきた。『闇の福音』……エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

そう言いながら男はフードを脱ぎ、顔を見せる。青い髪に赤い瞳の少年、レント……2代目の『クランの猛犬』は最強の悪の魔法使いを前に不敵に笑っていた。

エヴァンジェリンの家に上がりこんだレントはローブを脱ぎ、エヴァンジェリンに向かい合つて座っていた。

「どうぞ」

「お、サンキユ」

茶々丸がお茶を持ってくるとレントは礼を言いながら茶を啜る。

「で、貴様はいつたい何者だ？」

「俺はレント。レント・クー・フリーン」

レントが自身の名を告げるとエヴァンジェリンは少し驚いたような顔になる。

「ほう、貴様が今魔法世界で噂の『クランの猛犬』か」

「アンタみたいな高名な魔法使いに知られているとは光栄だね」

「ふん、それぐらいの情報は持っている。貴様の名はいろいろと有名だからな。無論、貴様のギルドもな……しかし貴様も思い切ったことをしたものだ。彼の伝説の大英雄と同じ異名を名乗るとはな」

「本人からの許可は貰ってるんでね」

談笑を続けるレントとエヴァンジェリン。しかし2人は一切油断せず、互いを観察している。

「で、その『クランの猛犬』が私になんのようなのだ？」

「ああ、単なる勧誘さ」

レントの言葉にエヴァンジェリンは眉を顰める。

「勧誘だと?」

「おう。エヴァンジェリン、『赤枝の騎士団』に入らないか?」

「ぶ、くくくく……はっはっはっはっは!! 貴様正気か? 私は世に名高い『悪の魔法使い』だぞ?それを誘うなど……」

「『悪の魔法使い』かどうかは関係ねえよ。俺は自分が気に入った奴を勧誘してるだけだ。悪党だろうとなんだろうと関係ねえ。そもそも俺は『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』なんて名乗ってる連中は嫌いだね」

しばらく笑っていたエヴァンジェリンだがレントの言葉にポカンとした表情をしている。この世界にいる魔法使いはほとんどが『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』を目指している。だが、見るからに10代前半のレントはそれが嫌いだと言ったのだ。ある程度歳の行っている人間ならばそれもあるかもしれないが……まあ、そもそもレントは魔法使いではなく騎士なのだが。

「いや、ひさしぶりに面白い奴に会ったな。そんなに『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』は嫌いか?」

「嫌いだね。そもそも、その意味も知らずに『正義』なんて名乗っている奴は気に入らねえ。それに『赤枝の騎士団』にいる奴は『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』とは程遠い奴らばかりだしな」

レントはこの世界に転生する以前、正義の味方を目指した男『エミヤシロウ』の生き様を知っている。それを知っているレントにはこの世界の大多数の『立派な魔法使い(マギステル・マギ)』がどう

にも気に入らなかつた。

「くくく、本当に面白い奴だ。その誘いは受けてもいいのだが……生憎と私は忌々しい呪いをかけられていてな。麻帆良から出ることはできん」

「それこそ問題ねえ」

そう言うとレントは懐から1つの小瓶を取り出す。

「アンタが『千の呪文の男』サウザンドマスターに呪いをかけられたことは知ってるさ。だから、その呪いを解く為の魔法薬を持ってきたんだよ」

「この呪いを解くだと？この呪いはナギの奴が馬鹿魔力で無理矢理かけたものだぞ？そう簡単に解けるものでは……」

「うちのメンバーを舐めるなよ？戦闘はまるで期待出来んが、こと魔法薬に関しては右に出るものがないマッドが作った特製の解呪薬だ。仮に完全に解くことができなかつたとしてもかなり弱らせることができる。そうすりゃあとは自分の魔力で無理矢理破れんדר？」

レントは自慢げにエヴァンジェリンを見る。一方のエヴァンジェリンの視線はレントの出した魔法薬に向いている。

「……つまりこの薬を提供する代わりに『赤枝の騎士団』に入れと  
いっているのか？」

「いや、こいつはやるぜ」

「なんだと？」

エヴァンジェリンは再び驚く。これを対価にすれば自分を『赤枝の騎士団』に引き込むことができるというのにそれをせず、ただで薬を渡そうといているのだ。

「俺はアンタが気に入ってるんだ。それに、無理矢理入れんのは俺の性に合わないしな」

「くくく、本当に面白い男だな。いいだろう、『赤枝の騎士団』入ってやるうじゃないか」

「んじゃ、今日から仲間だ。よろしくな」

レントとエヴァンジェリンは互いに右手を差し出し、握手をする。すでに2人の間には最初の頃の互いに探りあうような刺々しい雰囲気はなくなっていた。

「そういえば私の呪いが解けたら仮契約でもするか？」

エヴァンジェリンは薬の蓋を開け、レントに問いかける。

「いや、止めとく。仮契約は俺が本気で惚れた相手だけにする予定だからな」

「そうか……それは残念だ」

エヴァンジェリンは冗談めかした口調で言う。

「あ、それとこいつを首から下げとけ」

レントはエヴァンジェリンに自分の部屋から出るときに持ってきた魔法具を渡す。

「ん？これはなんだ？」

それは金色の満月の形をしたペンダントだった。

「そいつをかけてりやお前さんの呪いが解けたことを学園の連中に知られないで済む。簡単に言や認識魔法の魔法具の一種だ。俺は麻帆良で生活する予定だからな」

「そうか、まあ確かに貴様の周りならば退屈はしなさそうだな。いいだろう、貴様がここにいるうちは私もいてやるう」

そう言うとエヴァンジェリンは首にペンダントを下げる。

「さて、では飲ませてもらおう」

「ああ、そういえば……」

エヴァンジェリンが薬を飲んだ瞬間、レントが何かを思い出したように言う。するとその瞬間、エヴァンジェリンの身体が光だし、彼女の呪いが解ける。

「た、確かに呪いは解けた……だが……」

しかしエヴァンジェリンの顔色はかなり悪い。今にも倒れそうだ。

「言い忘れてたけどそれな。効果が高い代わりに死ぬほど不味いぞ。そりゃもう凄まじく」

「さ、さきに……言え……ガクッ！」

その場に崩れ落ちるエヴァンジェリン。その後、エヴァンジェリンは1週間寝込んだという。

### 第3話 新たな仲間、闇の福音（後書き）

ちなみにエヴァンジェリンはヒロインにはなりません。主人公の性別の違う親友にする予定です。

#### 第4話 試合、猛犬VS闇の福音（前書き）

今回はレントとエヴァが試合します。……しかしランサーの保有スキルってネギま世界の魔法使いの天敵のような気がする。

レントの名前を少々変更し、レント・クー・フリーンにしました。意見を下さった方有難うございます。

#### 第4話 試合、猛犬VS闇の福音

エヴァンジェリンの呪いが解けて早数日、レントはエヴァンジェリンの家に来ていた。

「……………」

レントは目の前でベッドに横になっているエヴァンジェリンを見る。まるで眠っているかのように安らかだ。そしてレントはエヴァンジェリンの顔に1枚の白い布をかぶせた。

「……………可笑しい人を亡くしてしまった……………」

そして静かに合掌し、目を瞑る。それが済むとレントはエヴァンジェリンに背を向け、歩きだした。

レントは大切な仲間を失った……………しかし彼女はレントの中に生き続けるだろう……………そしてレントの戦いはこれからも続いていく……………  
『魔法先生ネギま〜猛犬を継ぐ者〜』……………完……………



エヴァンジェリンの咆哮が辺りに木霊していた。

「落ち着いたか？」

数分後、レントはようやくエヴァンジェリンを宥めることに成功していた。

「誰のせいだ誰の！？……まったく、人が昼寝しているときにアホなことを始めおって」

ちなみにこの日は休日である。そのためエヴァンジェリンもレントもこうして昼間から会っている。

「んで、用件は何だ？」

ふと、レントがエヴァンジェリンに尋ねる。元々はレントがエヴァンジェリンに呼ばれた為に今日はここを訪れていたのだ。

「ああ、簡単だ。レント、私と戦え」

「……………理由は？」

レントの言葉にエヴァンジェリンはうつすらと笑う。

「なあに、先日は私も貴様があまりに面白いやつだから『赤枝』への加入を承諾したが考えてみれば私は貴様の實力を知らん。自分が所属するギルドの団長の實力を知りたいと思うのは当然だろう？」

それに納得するとレントはエヴァンジェリンに連れられ、エヴァンジェリンの所有する『ダイオラマ魔法球』に入って行った。

「ここなら周りの被害を気にせずに戦えるだろう？学園のジジイどもにも見つからんしな」

「確かに……じゃ、始めますかねえ!？」

そう言うとレントの手に膨大な魔力を内包した呪いの朱槍ゲイボルクが現れる。

「む……」

レントの朱槍を見たエヴァンジェリンの表情が変わる。どうやら本能的にゲイボルクの危険性を察知したらしい。

「言つとくがいきなりトップギアから行くぜ?遅れんなよ?少しでも遅れたら……」

レントはゲイボルクを構え、まるで四足獣のように体制を低くしていつでも走りだせるように準備する。

「すぐに決着ケツがつくぜ!」

「ふん、誰に向かってそんな口をきいている?小僧!」

エヴァンジェリンの言葉を発すると同時にレントがまっすぐにエヴァンジェリンの眼前に近づく。

「っ!?!」

「おらぁ!」

予想外のレントのスピードに驚くエヴァンジェリン。だが長年の経験ゆえかその最初の突きを避けることに成功する。しかし……

「まだまだ!」

さらにそこから連続で高速の連突がエヴァンジェリンに襲いかかる。

「ぐっ！ちい！」

接近戦は分が悪いと考えたエヴァンジェリンはすぐに後方へ後退する。

「させるかよ！」

しかしそこはレントも予測済みでエヴァンジェリンが後退した方向にすぐさま追撃を仕掛ける。

「（これほどとは……予想外だ、接近戦では勝てん！）だが！」

再びエヴァンジェリンはレントから距離をとる。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック……魔法の射手連弾・闇の29矢！」

後退と同時に放たれた魔法の射手が追撃しようとしてきたレントに殺到し、直撃した……いや、少なくともエヴァンジェリンにはそう見えた。

「おいおい、この程度じゃ俺には勝てないぜ？」

エヴァンジェリンのすぐ横からレントの声が聞こえると同時に横薙ぎの攻撃が襲う。それに瞬時の反応し、防御するがエヴァンジェリンは堪え切れず吹き飛ばされた。

「ぐっ！」

すぐさま体勢を立て直そうとするエヴァンジェリン。しかし彼女の目の前にはゲイボルクの切っ先が突きつけられていた。

「これで俺の実力をわかってくれたかい？」

「……ふん、そうだな…確かに申し分ない、私の負けだ」

そう言うとエヴァンジェリンは立ちあがる。

「だが、なぜさっきの魔法の射手が避けられたのだ？あれは直撃だったはずだ」

「あゝ、あれね」

その質問にレントは頬を掻きながら答える。レントがああ攻撃を避けられた理由は簡単だ。

レントの師であるランサーこと、クー・フリーンから受け継いだ保有スキル『矢避けの加護』。その視界から放たれた飛び道具の攻撃に対処する能力である。あときはエヴァンジェリンが視界内にいたため、レントは魔法の射手に対処することができたのだ。

レントはそのことと自身の出生（原作知識は言わず、死んで転生したことのみ）教えた。もつともこの辺は他の赤枝の騎士団のメンバーにも教えてあることだが。

「バグだな」

それを聞いたエヴァンジェリンからの第一声だった。

「だいたいそれを私に教えてよかったのか？」

「あ？問題ねえだろ？仲間に隠し事すんのはしょうに合わねえしな」  
ちなみに原作知識を教えていないのはレント自身、大分忘れてい  
からである。

「で、赤枝と言うのは何か掟でもあるのか？だいたい騎士団と付く  
なら掟ぐらいありそうなもんだが」

「別に難しいこたねえよ。ただ唯一絶対の掟が『絶対に仲間を裏切  
るな』そんだけだ」

レントは笑って答える。ちなみにこれは師であるランサーの所属し  
ていた赤枝の騎士団の『不忠さえしなければどう戦ってもいい』と  
言うのを真似ている。要するに裏切りさえしなければ何をしてもい  
いのである。

「なるほど……そんな緩い掟だからあんな毒のような薬を作る奴が  
所属しているわけだな？」

毒のような薬とはエヴァンジェリンの封印を解いた魔法薬である。  
あの薬は本気で不味かったらしい。良薬口に苦しというが苦すぎた  
のだろう。エヴァンジェリンは納得しながらも薬を作った団員をい  
つか殴ると心に誓っていた。

## 第5話 秋の夜長の襲撃事件（前書き）

更新です。

一気に時間が飛びます。穴だらけの駄文ですがよろしくお願ひします。

## 第5話 秋の夜長の襲撃事件

レントが麻帆良に入学してから最初の秋になった。……時間飛ばしすぎとか言わないでください。レントにとってこれと言った問題が起きてないんですから。

「Zzz……」

窓の外の木が紅葉で鮮やかに色づく中、レントは教室の自分の席で机に突っ伏して寝ていた。レントの席は窓際が一番後ろ、なんとも寝やすい位置である。

安らかな顔で眠る彼を起こそうとする者などいないだろう。それぐらい気持ちよさそうに寝ている。

が、彼の睡眠はもうあと少しで邪魔されることとなる。なぜなら……

……

「フリーリン……そんなにわしの授業はつまらんか？ん？」

ちょうど授業中だったからだ。

「悪い、待たせた」

放課後、レントは以前来たストリートバスケのコートにやってきた。そこにはすでにレントにとってエヴァンジェリンや茶々丸を除いた唯一の女子の友達である明石裕奈が待っていた。

「随分遅かったにや。待ちくたびれたよ」

「しょうがねえだろ？先生に説教されてたんだから」

レントはあその後、居眠りの件で先生に残され、説教を受けていたのだった。

「まあいいや。じゃあ始めよっか？今日こそレントを抜いてやるぞ」

そう言って裕奈は持っていたバスケットボールを構える。春に出会

つてからこの2人はこうして時間が合えばバスケの1on1で勝負をしている。

もはやこの勝負はこのコートを使っている者たちの間では名物になっていくのだが……裕奈は今までレントからゴールを奪ったことは一度もないというのが現状だ。

その為はこのコートを使っている見学者たちの中で賭けが行われたのだが、毎回レントに賭けたほうが儲けている。いまでは裕奈が何本ゴールを奪えるかなどと言う細かいところまで賭けの対象になっている。

ちなみに実は裕奈の友人はこのことを知らない。このコートは男子中等部に近い位置にあるため、めったに女子は来ない。そのため非常にむさ苦しい。裕奈とてレントがいなければほとんど来ないかもしれない。

……と、そんな2人だが別に恋人同士だとか片思いだとかそんな色っぽい関係ではなく、単なるバスケ仲間だった。

裕奈はスポーツマンらしく負けず嫌いな一面があるからかどうしてもレントを負かしたいらしい。

一方のレントは裕奈にそれなりに好意を持っているがそれが恋愛対象としてかどうかと言うのは不明である。

もっとも、レントには師であるランサー譲りに女好きな面があるのでこれから先はどうなるかわからないが。

だが……この日、この2人の関係に変化が訪れることとなる。

それはバスケの勝負が終わった後のこと、裕奈は自身が生活している女子寮に帰り、レントも自室に戻っていた。……ちなみにバスケ勝負はレントの完勝で終わり、裕奈は「覚えてるよ」などと言う捨て台詞を言っていたのは余談である。

「ん？」

自室で筋トレをしていたレントはふと、違和感を感じとる。もっとも、レントにとっては初めてではない。

これまでも何度か感じた気配……外からの侵入者の気配だ。それを感じたレントは認識疎外の効果のかかったローブを身に纏い、部屋の窓から飛び出す。

既に辺りは夜となり、人通りはほとんどない。そんな中で感じる異形の気配。

「（数が多い……）」

そう、レントが入学してから今までもそれなりに襲撃はあったが明らかに数が多かった。レント自身も魔法先生や魔法生徒の数もエヴァンジェリンから聞いてある程度は把握しているが人手が足りるかは微妙だった。

「（つたく、しょうがねえな）」

そう考えたレントは女子寮の方に駆け抜けていく。男子寮側にも気配はしたがそれと同時に数人の魔法先生、もしくは魔法生徒の気配も感じたので大丈夫だろうと考えて女子寮方面に行ったのだ。

下手に魔法関係者がいるところに行つて方が一見つかれば面倒なことになる。だからと言って無関係の一般人が襲われるのも寝覚めが悪いので魔法関係者が手薄のところに向かったのだった。

そして女子寮近くに来ると案の定、魔法関係者の気配が少ない。

「（こつちか……）」

レントは魔法関係者がいない方向から近づくと異形を掃討するために再び駆け出す。ここで自分が異形を倒せば話題になるかもしれないが自分に行きつく可能性はかなり低いのでローブを被っていればばれることは少ない。

そうして気配のする方向に走って行くレントの目の前には信じられない光景が広がっていた。

S I D E : 裕奈

「むっ、どうすればレントに勝てるのかにゃ〜?」

私は考え事をしながらコンビニで買い物を買ってきた。ちょうど飲み物が切れてたんだにゃ〜

「っていつか今さらだけどレントって絶対高校生とかよりも上手いよね」

私が考えるのは春に出会ったアイルランドからの留学生、レント・クー・フリーンのこと。春に出会ってから何度もバスケットで勝負してるんだけど全然勝てないんだよね。

バスケットは私の得意なスポーツで部活にも入ってるからどうにも負けたくない。でもいまだに勝てる気がしないんだよね……

「……………ん？あれ？」

女子寮に向かつて歩いて行くと人影が目に入った。知り合いじゃないし……………なんかフード被つてて顔が見えないけど……………もしかして不審者？

「……………ほう、一般人のようだが中々の魔力だ。奴らの餌にはもってこいだな」

魔力？餌？この人が何を言ってるのかわからないけど1つだけわかったことがある。それは……………この人が危険だということ……………

「さあ、娘……………我が下僕たちの糧になれ」

すると地面が光りだした。それはまるでマンガみたいな光景だった。そしてその光が収まるとこれまたマンガみたいな鬼みたいな顔の蜘蛛が……………

「あ……………ああ……………」

逃げなきゃ……………頭ではそう考えてるのに恐怖で身体が動かない。

「さあ、存分に喰らえ」

その人が命令すると蜘蛛は口を開けて近づいてくる。食べられる？そんな……………やだ……………

「いや……………いやああ…！」

私が恐怖で目を瞑る……しかし、そのあとに私を襲ったのは痛みではなく浮遊感と、誰かに抱きしめられたような温もりだった。

そして目を開けると……

「レント……ト……?」

蒼い髪に真紅の瞳の私のバスケット仲間、レント・クー・フリーンに私は抱きかかえられていた。

第6話 秋の夜長の蹂躪劇、そして選択肢（前書き）

更新です。お待たせしたのに相変わらずの駄文と短さ。



すると術者は杖を構える。どうやら戦う気らしい。

「やるってのか？退くってんなら邪魔しねえぞ？」

「黙れ、ここまで来て退けるか。それに……貴様ごとき青二才ならどうにでもなる」

術者の顔が嘲笑うかのように笑みを浮かべる。そんな姿にレントはやれやれと肩をすくめながら槍を構える。

「そっかい……なら……いきますかねえ！」

「ふん、行け！」

その言葉と共に術者の呼びだした異形たちがレントに襲いかかる。

「へ、遅えよ！」

そしてレントは異形たちを迎撃するために獣のように駆け出した。

〈SIDE：裕奈〉

今の私はとんでもないものを見ている。漫画で見たような妖怪？たちにも驚いたけどレントは私なんか全然見えない速さで妖怪？たちを倒していく。

倒された妖怪たちは片っ端から消えていく……これって夢……じゃないよね？こんなリアルな夢ないし。でも……

「おらおら！どうしたどうした!？」

レントは妖怪？たちを槍で笑いながら貫いたり切ったりしている。その光景はすごく怖いはずなのに……

「カッコいい……」

まるでその姿は何かの映画のワンシーンみたいで……私はそんなレントに見惚れていた。

〈SIDE END〉

「おいおい、これでもまいか？ 齒こたえがねえなあ？」

朱槍を肩に担いで笑うレント。すでに周りにいた異形たちは先程裕奈を食おうとした蜘蛛1匹になっている。

「……と、どうやらお楽しみは終わりみてえだな」

するとレントはこの場に近づいてくる複数の気配に気づく。どうやら麻帆良の魔法関係者が近付いてきているらしい。

「く……死ねえ！」

その隙を突いて術者は蜘蛛に命令し、レントを襲わせる。

「だから遅えって」

が、次の瞬間蜘蛛の頭が朱槍で串刺しにされる。

「な！？」

その光景に驚きの声を漏らす術者。そしてそれが術者が放った最期の言葉だった。目の前ではレントが朱槍を構え、術者に狙いを定めていた。

「死ね」

冷酷に言い放たれる死刑宣告。次の瞬間、レントの高速で繰り出された朱槍が術者の心臓を破壊していた。

それから数分後、現場に到着した魔法先生たちが見たものは驚きの表情のまま心臓を破壊されて即死した術者の遺体だけだった。

一方、裕奈はレントに連れられエヴァンジェリンの家に来ている。裕奈がレントの居る世界を垣間見てしまった以上……今後のことを考えてレントがそうしたのだ。

「なるほど……事情はよくわかった」

レントの説明に納得するエヴァンジェリン。ちなみに裕奈は移動中にレントから『こちら側』について簡単に説明を受けている。

「で、貴様はどうする明石裕奈？こちら側に来るか……それとも記

憶を消して日常に戻るか……まあ、貴様はいずれ知ることになるかも知れんがな」

エヴァンジェリンが意味深に笑う。

「まあいい、一晩やるから今後どうするか明日までに決める。明日の放課後、またここに来い。レント、貴様もだぞ？」

「へいへい」

レントは右手をひらひらさせながら軽く返事する。

この後、裕奈はレントに送られて女子寮へと帰って行った。

## 第7話 選択と覚悟（前書き）

更新です。駄文なうえ穴が多いかもしれませんがよろしく願います。

## 第7話 選択と覚悟

「……………もう朝か……………」

窓から差し込む朝日に裕奈はのそりと起き上がる。あまり眠れなかったのか少し隈ができていた。

「どうするか……………かあ……………」

裕奈は起き上がりながら1人呟く。二段ベッドの下のほうではルームメイトの大河内アキラがまだ眠っている。時間はまだ4時……………こんな早くに目が覚めたのは初めてだった。

そんな裕奈が眠れなかった理由は当然昨夜の一件……………自分が垣間見た世界……………1学期に知り合った男子の友人であるレント・クー・フリーンとクラスメイトのエヴァンジェリンがいる世界。

今日中に今後どうするかを決めなければならぬのだが……………問題が問題だけに相談できる相手がないことが裕奈の悩みの種だった。

「裕奈、どうしたん？目の下すごい隈やで？」

「あゝ、ちよつと寝れなくてね」

友人である和泉亜子からの質問に裕奈は冗談のように返す。が、内心ではずつと悩んでいた。

「（あれが……本当のレント……）」

脳裏に焼き付いているのは昨夜の自分を護って戦うレントの姿。裕奈はその光景にときめき、同時に恐怖した。

助けられた直後はまるでアクション映画のように戦うレントの姿に見惚れ、かつこいいと思った。彼のことを考えるといまだにドキドキする。恐らく自分はレントに惚れたのだろう……と結論付けるのは容易かった。

だが、それと同時にレントに助けられ、エヴァンジェリンに説明を受けて女子寮に帰った後にもう1つの光景を思い出した。それはレントが躊躇いなく人を殺す姿……

助けられたときはレントの姿に見惚れ、軽い興奮状態だったが冷静

になってくると人を殺すレントの姿に恐怖を覚えた。

レントに恋をした……それは変わらないが同時にレントに恐怖もしていた。もしもこれがレントへの恋心だけならば裕奈はすぐに『向こう側』に行く決意をしたかもしれないが……人が死ぬ光景が裕奈を悩ませていた。

「はあ……」

今日何度目かの溜息……その姿に裕奈の友人たちは敏感に反応する。

「ねえ、裕奈。何か悩み事？」

裕奈の友人でルームメイトの大河内アキラが心配そうに質問する。

「あゝ、ちょっとね……」

「そうなん？なんやったら相談してくれへん？なんか解決するかもしれないよ？」

亜子の言葉に『ん……』と唸った裕奈だがとりあえずところどころぼかして相談することにした。

「例えばだよ？例えば……好きな人が自分と違う世界にいて、そこが凄く怖いところだったら……どうする？」

「なになに！裕奈好きな人ができたの！？」

裕奈の友人の佐々木まき絵が話題に食いついた。

「例えばだつて！例えば！／＼／」

裕奈は凶星をつかれて若干赤面し、アキラたちに意見を求める。

「ん、私は一緒にいたいって思うかな？好きな人ならなおさらに」

アキラが真面目な表情で答える。それに続いて亜子とまき絵も答えた。

「うちもそうやな……好きな人が怖いところにいるんですけどすごい心配やし」

「ん、私もだね。怖いのはやだけど好きな人がそういうところにいるんだつたらね」

「そっか……」

裕奈は3人の意見を聞いて考え込む。

「でも裕奈。1番重要なのは裕奈がどうしたいかだよ？」

「私が……どうしたいか……」

すると裕奈は決意したかのように頷いた。

「うん、そうだね。ありがとう！」

悩みが晴れたように晴れやかになった裕奈はアキラたちに笑顔を向ける。

「でも裕奈に好きな人がね〜」

「だからそれは例えばだつてば〜！」

まき絵のセリフに必死に弁解する裕奈だつた。……もつとも、別に外れてはいないのだが……

そして放課後、裕奈はエヴァンジェリンの家に来ていた。家の中にはすでにレントも来ている。

「で、明石裕奈。どうするかは決まったのか？」

エヴァンジェリンは茶々丸の入れたお茶を飲みながら裕奈を見据える。

「うん、私はそっち側に行くよ」

「ほづ……」

「もう知っちゃったし、私にはまるで関係ないわけじゃないんですよ？」

「…そうだ。遅かれ早かれ貴様は知る可能性が高い…だが知らないで済む可能性もある」

エヴァンジェリンはそう言うが裕奈の決意は変わらない。

「それでも……私は忘れないよ。それに、私は……レントを支えた  
いから」

「裕奈……」

裕奈がそう言い切った瞬間、レントが話しかける。その声を聴いて振り返った裕奈に……己が持つ呪いの朱槍の切っ先を向けた。

「テメエ、正気か？」

レントは殺気を出しながら裕奈に問い詰める。一方の裕奈はレントの殺気を受け、身体が小刻みに震えていた。ちなみにレントは裕奈が気絶しない程度に殺気を抑えている。気絶させてしまっただけは裕奈

の答えを聞けないからだ。

「『こつち側』は命のやり取りが当たり前の世界だ。殺らなきゃ殺られる……それはダメエも見たはずだ」

その言葉に裕奈は昨夜の自分に迫った死の恐怖と術者がレントに心臓を貫かれた光景がフラッシュバックする。

「『こつち側』に来るってことは殺す側に周る可能性があるってことだ……その覚悟がダメエにあるか？」

そう……レントたちがいるのは弱肉強食の世界……医療系の魔法使いならば殺すことはあまりないかもしれないがそれはあくまで一部の人間であり、ましてやレントと一緒にいるなら人を殺す可能性は高い。

だからこそレントは裕奈に問う。「お前にその覚悟があるのか？」

……と……レントは別に『こちら側』に来る分にはそこまで気にしない。率先して引き込もうとは思わないがそれが自分の意志であるのなら障害する気はない。問題はそれだけの覚悟があるのか？ということだ。

だからレントは裕奈に気絶しない程度に殺気をぶつけている。この程度の殺気に耐えられず根を上げたり文句を言ったりするならば問答無用で気絶させ、記憶を消すつもりだった。

もっとも、レントがここまでするのは自分が真つ先に関わったためである。もしもこれが学園側が保護していたらここまで気にしない。基本的に自分に関係なければ無関心なのである。

「ましてや俺は素人に支えられるほど弱くねえぜ」

「それでも……私は忘れないよ」

レントの殺気に震えながらも裕奈は反論する。

「た、確かに怖いよ……レントが人を殺したときも恐かった……けど、それ以上に私は好きな人がそんな怖いところにいるのに忘れるなんてできない。今は弱いけど……私は好きな人の力になりたいよ」

裕奈がそう言うとレントはハトが豆鉄砲食らったような顔になり、殺気がおさまった。一方のエヴァンジェリンは必死に笑いをこらえている。

「?……………!?!?!?!」

そしてレントの雰囲気が変わったことに裕奈は疑問符を浮かべるがすぐに顔が赤くなった。なんのことはない。レントの殺気に耐えるのに必死で言葉を選んでいられず、あるうことが自分の本心を打ち明けてしまったのだ。

「くくく……はははははははははは……はあはあ……お前の気持ちはよくわかったよ明石裕奈!で、どうするんだレント?」

ついに堪えきれなくなったエヴァンジェリンは大声で笑いだし、ニヤニヤと笑いながらレントを見る。裕奈の顔はもう真っ赤だった。

「ちっ、しゃあねえな……ここまでまっすぐ気持ちぶつけられて認めねえわけにもいかねえだろ」

レントのその言葉に裕奈は笑顔になり、その場へたり込んだ。

「ん？どした？」

「にははは、安心したら腰ぬけちゃった」

レントの問いに苦笑いする裕奈。

「へっ、俺も師匠に似ていい女にや縁がないと思ってたが……そうでもねえな」

「え？」

すると次の瞬間レントは裕奈を抱き寄せた。

「ええ！！！！」

「俺はお前が気に入った。覚悟しとけよ？本気で俺の女にしちまうからな？」

レントは笑いながら裕奈に問いかける。

「……もちろん！望むところだにや」

一方の裕奈もレントに満面の笑みで返していた。

## 第8話 仮契約（前書き）

更新です。今回はタイトル通りです。

相変わらずの駄文ですがよろしくお願いします。

感想いただけると嬉しいです。

## 第8話 仮契約

裕奈が『こちら側』に来ることを決めた後、レントはエヴァに裕奈に魔法を教えてくれるように頼んだ。

これに対してエヴァは快く承諾。その光景にレント自身意外だったのだがどうやら『呪いを解いてもらった借りを返す』……というこ  
とらしい。

しかもここで借りを返しておけば後々あのクソ不味い魔法薬を作ったマッドサイエンティストを心置きなく殴れるとのことだ。

そしてエヴァが裕奈に魔法を教えることになった後、3人はエヴァの所持する魔法球の中に来ていた。

裕奈は『レントを支える』と言った。それは即ち『赤枝の騎士団』に入ることを同義であり、赤枝に入る以上、身を護れる程度の力では不足である。そのためこの魔法球の中で扱くということに決まった。

「さて、明石裕奈。まずはこれから毎日やってもらうことがある」

エヴァの言葉に裕奈は疑問符を浮かべる。

「明石裕奈、まずはそこに立て」

エヴァがそういつと裕奈は指定された場所に立つ。

「立ったけど、何するのにかやエヴァちゃん？」

冗談めかして言う裕奈。

「簡単だ。おいレント、こいつに向かって思いっきり殺気をぶつけろ」

「え!？」

エヴァの言葉に裕奈の顔が引き攣る。勿論裕奈自身もエヴァに逆らう気はない。レントを支えるといったのは自分だしそのためにレントに自分の気持ち告白してしまった。

だがレントに覚悟を試されたとき、気絶しないように手加減されてぶつけられた殺気で恐怖によって身体の震えは止まらず、腰を抜かしてしまった。さすがにあの恐怖はすぐに忘れるのは無理なので笑顔が引き攣ってしまったのだ。

「一応言っておくがレントがさっきぶつけた殺気は本気じゃない。これから毎日こいつの本気の殺気をぶつけさせて殺気に馴れさせる。こいつの本気の殺気を受けて意識を保っていられるようになれば生半可な殺気では動じなくなる」

その説明を受けて裕奈は納得する。確かにいくら技術がついても殺気に耐性がなければ戦場では足手まといだ。

裕奈は深呼吸をし、レントから来るであろう殺気に備える。

「じゃあ行くぜ?」

レントは裕奈の準備ができたのを見ると一気に殺気を裕奈にぶつけ

る。体感時間にして数十年ランサーに実戦形式の鍛錬で鍛えられた殺気はかなりのものである。というか師であるランサーは割とマジで殺気をぶつけてきたのだ。

そして殺気をぶつけられた瞬間、裕奈の脳裏には一瞬にして殺されるイメージが浮かび上がり、裕奈の意識はブラックアウトした。

「ふむ、まあ今まで平和の中で生きてきたものが今の殺気を受ければこうなるだろう。とりあえずこの別荘の中で1日単位で今のをやるぞ」

「へいへい」

エヴァの台詞にレントは気の抜けた返事をし、裕奈をお姫様抱っこで抱きかかえ、別荘の中のベッドに寝かせに行った。

「ん…んう……」

「よお、目え覚めたか？」

1時間後、裕奈は目を覚ました。目の前にはレントが椅子に座っていた。

「あれ？私……」

「お前俺の殺気受けて気絶しただろうが？」

「あ~~~~~……」

裕奈は思い出したように目を泳がせる。

「なんか情けないとこ見せちゃったね……すぐに気絶しちゃって……痛っ!?!」

裕奈の言葉にレントはデコピンをした。

「ば〜か。ついさっきまで一般人だった奴に耐えられたらこっちの立つ瀬がねえだろうが」

確かにレントの言うとおりである。ある程度裏の世界に関わってきた人間ならとにかくつい最近までただの女子中学生だった裕奈が絶えるのはまず無理だ。

「でもさ〜……」



それから数十分後、レントと裕奈はエヴァのもとまでやってきた。

「遅い！いちやつくなら余所でやれ馬鹿共！」

どうやらエヴァには全てお見通しだったらしい。レントは口笛を吹いており、裕奈は「にゃはは」と笑っている。

「はあ……まあいい。ところでレント、貴様は明石裕奈と仮契約するといっことでいいんだな？」

「ああ、いいぜ。惚れた相手となら文句はねえよ」

レントは笑いながらエヴァの質問に答える。レントが気に入ったというのは実質惚れたと同意義なのである。そもそもレントは惚れていない相手にキスなんてするほど軽くはない。

「え〜と、エヴァちゃん。その仮契約ってなに？」

「まあ簡単にいえばそれをすれば強力なアイテム『アーティファクト』が手に入る」

エヴァ……結構はしょっていたりする。

「えー！じゃあやるよ！どうすればいいの！？」

「簡単だまずはレントと2人でその魔法陣に入れ」

エヴァ指差す先にはすでに魔法陣の準備ができていた。

レントと裕奈は言われた通り魔法陣に入る。

「入ったよ」

「よし、あとはキスしろ。さっきまでしてたんだ、簡単だろう？」

「え？」

エヴァの言葉に裕奈が一瞬硬直する。が、その硬直はすぐに解かれた。なぜならレントがすでに裕奈にキスしたからだ。

「ん……んんう……／／／／／／」

当初はびっくりした裕奈だがすぐにレントからのキスを甘んじて受ける。そして裕奈の手元に1枚のカードが現れた。

「えっと……これが？」

「そう、それが貴様の仮契約カードだ」

そのカードには2丁の銃を構えた裕奈の姿が描かれていた。

## 第9話 変わった生活（前書き）

ずいぶん間が空いてしまいましたが更新です。多少時間が飛びます。

この後ももう少し日常を入れたら原作に入りたいと思います。

あとできれば裕奈のアーティファクトは突っ込まない方向で。

感想お待ちしています。

## 第9話 変わった生活

裕奈がレントの従者兼恋人になってから2ヶ月が経過した。裕奈はエヴァンジェリンの別荘で修業を続け、ある程度は戦えるようになってきていた。

「そろそろ！動きが鈍っているぞ！」

「くう、エヴァちゃん容赦ないなあ！」

エヴァンジェリンが裕奈に行っている修業はごく単純、模擬戦である。エヴァンジェリンは手加減をして格闘戦と魔法の矢のみで戦うというルールの下で行われている。

裕奈のアーティファクトは2丁の拳銃でデザインは解りやすく言うとDグレイマンのクロスが使っている断罪者ジャッジメントと同じ形状をしている。だがやはりマスターとなるレントが英霊の力を持っていたため、ただのアーティファクトではない。

「氷の9矢！」

「うわっつとつと……とお！」

裕奈は両手に持った銃を構え、自分に向かってくる魔法の矢を弾丸で撃ち落とす。裕奈の持つ銃は魔力を弾にして撃ち出すというもの。しかしこの銃にはもう1つの能力があった。

「いっつくよ！」『撃ち貫く死翔の魔弾ゲイボルグ』！」

裕奈の言葉と共に撃ちだされた2発の弾丸はエヴァンジェリンのもとに向かつていく。もちろんそんなものは簡単にエヴァンジェリンに当たるわけがない。エヴァンジェリンは容易く回避する。しかし……

ギョーン！

2発の弾丸はエヴァンジェリンが避けた方向に追尾し始めたのだ。これが裕奈の持つ2丁の銃『撃ち貫く死翔の魔弾』ゲイボルグの能力でこのアーティファクトはレントの宝具に似た性質を持っている。

「ええい、めんどくさいアーティファクトだ！」

その能力は一定以上の魔力を込めて放つことで弾丸が砕かれない限り、相手をどこまでも追尾する能力である。この能力はレントの『刺し穿つ死翔の槍』ゲイボルグと似たような特性だがこちらはレントのものに比べ、威力は遥かに低く防御力の高い魔法障壁で防ぐことができる。一方でこちらは速射性に優れ、しかも能力使用のための魔力消費もそれほど多くない。一応こちらの追尾能力をレントたちは宝具と同じく『真名解放』と呼んでいる。

「氷の9矢！」

エヴァンジェリンは自分を追尾してくる弾丸に向けて魔法の矢を放ち、弾丸を破壊する。その間にも裕奈は通常の魔力の弾丸をエヴァンジェリンに連射する。もともと才能があつたこともあり、この2ヶ月の修業でその狙いはさらに精確になっている。

「ならばこれはどうするー！」

弾丸を避けるとエヴァンジェリンは裕奈に急接近し、格闘戦を仕掛ける。もちろん格闘戦も裕奈に合わせて手加減している。

「うわつとー！」

裕奈は突き出された拳を身を反らして回避し、そこに魔力の弾丸を撃ち込む。

「ぬんー！」

エヴァンジェリンは撃ち込まれた弾丸を紙一重で回避し、そこからさらに格闘戦が展開される。裕奈は前線でも戦えるように銃を持っただま行つ格闘術『ガン⇨カタ』を習得しようとしていた。

「はっ！射撃は中々だが格闘はまだまだ甘いな！」

エヴァンジェリンが笑顔になりながら裕奈を攻め立てる。裕奈のガン⇨カタは一般人相手なら問題ないが流石にエヴァンジェリン相手では通用しない。

もっとも、2ヶ月でここまで成長したのは魔法球の中で修業しているからであつて外ならばもっと時間がかかっているだろうが……

「なんのー！」

再び裕奈が接近状態から銃を撃つ。しかしそれをエヴァンジェリンは鼻歌交じりで回避する。

「ふん！どこに向かって撃っているー！」

「それは勿論……エヴァちゃんに向かってだにゃ！」

だがエヴァンジェリンが回避したはずの弾丸は急激に方向を変え、エヴァンジェリンに迫る。

「っ！？『真名解放』か！？」

寸前のところで気付いたエヴァンジェリンは障壁で背後から迫る弾丸を防ぐ。

「これでー！」

エヴァンジェリンの注意が一瞬、追尾する弾丸に向いたところで裕奈は引き金を引こうとするが……

「甘いわぁー！ー！」

それはエヴァンジェリンにもお見通しで辺りに爆音が響き渡った。

「お、裕奈も結構やるようになったな」

一方、レントは愛用の朱槍を片手に2人の模擬戦を観戦していた。ちなみにレントもつい先程までイメージトレーニングをしていた。

「ふん、まだまだだ」

そこにエヴァンジェリンが気絶した裕奈を引き摺って戻ってくる。

「まあ、そこらの魔法使い共よりは強いだろうがな。少なくとも学園の魔法生徒相手なら大概は勝てるだろう。もつとも、この私が教えているのだからそれぐらいしてもらわなくてはな。そら、お前の女だ。目が覚めるまではお前が面倒見てやれ」

「へいへい」

レントは手をヒラヒラさせながら裕奈をお姫様抱っこして別荘内の家に向かって行った。

それから翌日、平日のため裕奈は授業に出ていた。エヴァンジェリンのほうは気が乗らないらしくサボっているが。

「ねえねえ裕奈。最近彼氏とはどうなったの？」

「ってなんでいきなりそんなこと聞いてくんの！？／＼／＼／＼／＼」

ちょうど昼休みの時間、裕奈は友達のまき絵たちと弁当を食べていた。まき絵は裕奈の彼氏……即ちレントのことを聞いてくる。

ちなみに裕奈は仲が良いまき絵たちにはレントと付き合いだしたことは話したのだが、レントと会わせたことはまだない。

「え、だって気になるじゃん。裕奈の彼氏がどんな人なのか」

「なになに？誰の彼氏だつて？」

するとそこに赤い髪の少女がニユツと顔を出した。裕奈たちのクラスメイトである『朝倉和美』である。

「げ、朝倉!？」

最近、『麻帆良パラッチ』と呼ばれ始めた和美に裕奈は嫌そうな顔をする。

「なにになに? 明石に彼氏が出来たって? そんなの私は聞いてないよ? 詳しく教えてよ」

和美はメモ帳片手に裕奈ににじり寄る。

「もしかして最近胸が急成長し始めたのはその彼氏が原因だったりするのかな?」

親父のようなことを言いながら和美は裕奈の胸を見る。

「なに? 裕奈の彼氏がなんだって!？」

さらにその和美の言葉を聞きつけ、クラスメイトの大半が裕奈のもとにやってきた。流石年頃の女子中学生。こういったことに興味津々である。しかも裕奈はまき絵たち仲が良い3人にしか彼氏が出来たことを教えていなかった。なので余計問い詰められることになるのだった。

結局裕奈は彼氏が出来たことは話したが詳しく教えたりはしなかった。

ちなみに余談だが裕奈はエヴァンジェリンの別荘で修業しているため、すでに原作での中学3年になった時の胸の大きさに近付いていた。

## 第10話 いざ、挨拶へ（前書き）

更新です。

今回は前半甘め、後半は裕奈父への報告です。

さすがに両親への報告はしておかないとは思いました。

感想お待ちしております。

## 第10話 いざ、挨拶へ

「ほらレント。起きなよ〜」

ある日の朝、レントのいる男子寮には裕奈の姿がありまだ寝ているレントを叩き起こしていた。……と言うのも最近では特別珍しいことではなくなっている。

平日は女子寮の場所が離れていたり部活の朝練があったりで無理だが休日になると裕奈はこうしてレントのもとに出向いてくるのだ。

それというのも実はレントは朝に非常に弱く、普段の生活も少々だらしなくところがある。掃除が苦手で散らかっていたり食事が肉ばかりで栄養が偏ったりしているので休日に裕奈が掃除したり平日に弁当を作ったりいろいろ世話を焼いているのだ。

ちなみに裕奈は平日、レントにときどき弁当を作って行って男子中等部ではレントの弁当を狙う男連中がいたりする。

「ほら、今日はお父さんの所に行くんだから早く起きてよ」

裕奈が寝ているレントの肩を揺する。するとレントが裕奈の手を掴んだ。

「へ？ふにゃ！？」

裕奈はそのままレントにベッドの中に引きずり込まれる。一応言っておくがレントと裕奈はまだ一線を越えていない。ねんのため。

「ちょちょ、レント！／／／」

ベッドに引きずり込まれた裕奈は顔を赤くしてレントに抗議の視線を起こる。一方のレントはどうやら起きているらしくニヤリと笑う。

「んだよ、好きな女抱きしめちゃいけないってのか？」

「もう、仕方ないにや／／／」

ベッドの中で裕奈を抱きしめ、その感触を堪能するレント。裕奈もまんざらではなくレントを抱きしめ返す。

それから数分後、抱きしめたりキスしたりと散タイチャイチャしたレントはベッドから起き上がる。

「はあ…はあ…／／／／／」

しかし裕奈の方は顔が真っ赤で息を荒くしていた。レントが何度も何度も深いほうのキスをしたので少々酸欠気味なのだ。

裕奈が息を整える間、レントはそそくさと身支度を整えていく。そして裕奈が起き上がるころにはレントも着替え終わっていた。来ている服はＴシャツにジーンズと黒いジャケットという普段着である。

「よ、起きたか？」

「むっ、起こしに来たのは私なのにな」

からかうようなレントに裕奈は頬を膨らませて拗ねている。

「そう言つなよ。それともキスしないほうが良かったか？」

「ほんとにレントは意地悪だにや」

「ばっか、お前にだけだよ」

朝っぱらからラブラブな2人だった。

さて、朝のイチャイチャを終えたレントと裕奈はある場所に来ていた。それは……

「おゝ、ここか。裕奈の親父さんがいるのは」

「うん、お父さんには前もって連絡してあるよ」

裕奈の父親である明石教授が住んでいる教員宿舎である。なぜここに来たのかというところ……まあ有体に言えば両親への挨拶というやつだ。

裕奈の父親である明石教授は麻帆良学園の魔法先生で本来ならレントは進んで関わりとはしない。しかし裕奈の彼氏であり、仮契約をした相手で裕奈を命のやり取りがある世界に連れてきた本人としては魔法先生ではなく裕奈の父親に対する挨拶は必要だと考えた。

レント・クー・フリーン。こういうことには義理堅い男である。

ピンポン

宿舎の中に入った裕奈とレントは明石教授の部屋の前に来ると呼び

鈴を鳴らす。するとさほど時間がかからずに扉が開いた。中から眼鏡をかけた優しそうな男性、裕奈の父親である明石教授が出てきた。

「待ってたよ。君がレントくんだね？さあ上がってくれ」

明石教授が裕奈、レントの順で見た後に部屋へと2人を上げる。一瞬、レントを見たときに黒い何かが見えたのは気のせいではないだろう。

部屋に上がるとレントと裕奈は並んで座り、対面して明石教授が座る。

「さて、聞かせてもらおうかな？どうしてそうだったのか……」

明石教授が聞いてきたのは簡単に言えば「なぜ裕奈が魔法と関わるようになったのか」ということだ。

「ん？裕奈、親父さんに話したんじゃないかったのか？」

「今日詳しく話そうと思ってたから簡単にしか教えてないよ。私が魔法と関わることになったってことと彼氏ができたこと。あと私のことは誰にも言わないようにって頼んだんだよ」

つまり裕奈は自身が魔法に関わるようになった詳しい顛末はまだ明石教授に話してはいないらしい。

「まあ、こつこついうことは学園長に報告するものだとは思っただけだね。娘の頼みだしね。このことはまだ誰にも言っていないよ」

明石教授の眼は決して嘘を言っていない。恐らく本当に誰にも言っ

ていないのだろう。

「んじゃ、説明するか」

そしてレントは詳しい顛末を話し始めた。裕奈とは入学したばかりのころに知り合ったこと。2ヶ月前に侵入者から裕奈を助けたことで裕奈が魔法のことを知ったこと。その出来事で裕奈がレントに好意を寄せ、自分の意志で魔法に関わっていくことを決めたこととレントと恋人同士になったこと。今までの2ヶ月間はエヴァンジェリンに修業を受けていたこと。最後にレントが魔法世界で名が知られている『赤枝の騎士団』の団長で2代目『クランの猛犬』であること。話し終わるまで無言で聞き入っていた明石教授はレントと裕奈が話し終わるとすぐに頭を下げた。

「ありがとうレントくん。君のおかげで娘の命が救われた。随分遅れてしまったけど礼を言わせてくれ……ありがとう」

それは純粹に娘を助けてくれたことへのお礼。その姿にレントは少々むず痒い感覚になる。

「あゝ、別に気にしないでくれよ。俺は無関係な奴が巻き込まれんのが寝覚めが悪かっただけなんだからよ」

頭をポリポリと掻きながらレントが明石教授の言葉に答える。そんな2人に裕奈がクスリと笑う。

「それで裕奈はレントくんがいる『赤枝の騎士団』に入ろうと思っただけだね？」

「うん……駄目、かな？」

明石教授は軽く溜息を吐く。

「駄目って言っても入るんだろう？本音を言えば娘に危険な目には合ってほしくない。でも、それは裕奈が自分で悩んで決めたことだろう？だったら僕は応援するよ」

その言葉を聞くと裕奈の顔が明るくなって明石教授に抱きつく。

「ありがとうお父さん大好き！」

「これから、レントくんも…裕奈を頼むよ？」

「はい…」

レントもハッキリとした声音で答える。次にレントが麻帆良に来た理由とエヴァンジェリンの封印を解いたこと等を話す。

「なるほどね……まあ、彼女には裕奈を鍛えてもらってるみたいだし…僕はそこまで彼女を危険だと思っただけだからね。それでレントくんは自分のことを含めて学園側には内緒にしておいてほしいと……」

「ああ、いつかばれるかもしれないけどできるだけな……」

「……いいよ。魔法先生としては学園に報告しなきゃいけないんだろうけど、娘の命の恩人の頼みだ。君も生徒たちに危害を加えるつもりじゃないみたいだしね」

「心配いらねえよ。関係ない奴らに危害を加える気はねえし魔法関

係者だって向こうから仕掛けてこない限りこっちから手を出すつもりはねえ」

レントの頼みは明石教授に快く受け入れられた。どうやら明石教授は麻帆良でも話の分かる人であるらしい。

それからしばらくしてレントと裕奈は帰り支度を始める。

「ああ、そっだレントくん」

「なんすか?」

「いや、君に1つ言っておきたくてね」

そう言いながら明石教授はレントにしか聞こえないように小声になる。

「君と裕奈は中学生だ。く・れ・ぐ・れ・も……………清い交際で頼むよっ」

「……………はい……………」

明石教授が発する有無を言わさぬ重圧にレントは頷くしかなかった。殺気などには動じないレントも明石教授が出す父親の威圧感は初めてだったらしい。

## 第11話 文化祭デート（前書き）

お待たせしました、更新です。

今回はタイトル通り文化祭。と言ってもも原作前なので文化祭の話は今回だけです。

たぶんもうすぐ原作に突入します。

感想お待ちしています。

## 第11話 文化祭デート

裕奈が魔法の存在を知ってから約1年。2年生になった裕奈は相変わらずエヴァンジェリンの魔法球の中で修業に励みながら学生生活を送っていた。

そんなレントや裕奈が通う麻帆良学園は今、夏休み前の一大イベントの準備の真っ最中だった。即ち、『麻帆良祭』である。

今回の文化祭は男子中等部のレントのクラスと裕奈のクラスは共に出し物をする予定はなく、2人は麻帆良祭で一緒に周ろうという話をしていた。所謂『文化祭デート』である。

「あ、ゆうな。麻帆良祭暇なんやったらみんなで一緒に周らへん？」  
麻帆良祭まであと数日、裕奈は帰る準備をしているといつももの仲が良いメンバーに声をかけられる。

「ん〜、1日目なら大丈夫だよ？2日目と最終日は先約が入ってるから無理だけど」

裕奈は帰り支度をしながら答える。しかしそれが少し厄介なことになった。

「え、もしかしてゆうな。彼氏とデート？」

「え!？」

裕奈の発言にまき絵が瞬時に反応する。どうやら裕奈はあまり考え

て発言していなかったらしい。

「あ、ま〜……そうなんだけどにや〜／＼／＼／＼」

しかし仲が良い運動部メンバーは裕奈に彼氏がいることは知っている  
るので裕奈も照れながらも肯定する。

「1日目は向こうも友達と過ごすって言うから2日目から一緒に周  
ろっつって話になってね」

裕奈は運動部メンバーにレントと決めた麻帆良祭の予定を口にする。  
だがそれがいけなかった。

「ほほう……」

その話を聞いている赤いパイナップルがいた。

それから数日、ついに麻帆良祭が始まり、その2日目になっていた。1日目はレント、裕奈共にそれぞれレントは男子中等部の友人と、裕奈は2・Aのいつものメンバー、亜子、まき絵、アキラと麻帆良祭を楽しんだ。

そして2日目になって裕奈はレントととの文化祭デートを楽しむために女子寮から直接待ち合わせ場所に向かっていた。

しかし、その背後をこそそと追いかけるいくつかの影があった。

「ふっふっふっふ、明石の彼氏：この麻帆良パラッチ、朝倉和美がすっかり写真に収めるわよ」

そう、裕奈のクラスメイトであり以前も教室で裕奈に尋問した麻帆良パラッチ、朝倉和美である。以前は裕奈にうまく追及を回避されたが今回の文化祭デートを聞いて裕奈を尾行することにしたのだ。

「ちよつと朝倉！こんなことしていいの!？」

そんな和美を諫める声が背後から上がる。裕奈を尾行していたのは和美だけではない。他にも2・Aのクラスメイトである裕奈と仲が良い運動部メンバー、早乙女ハルナや近衛木乃香、椎名桜子、釘宮円、柿崎美砂、神楽坂明日菜がいた。やはりこの年代の女子中学生は色恋沙汰に興味津津であるらしい。

「じゃあなんで明日菜来てんのさ？」

「うー！そ、そりゃあその……」

最初は和美を諷めるような口調だった明日菜だが結局裕奈の彼氏が気になっていたらしい。それもそのはず、裕奈の彼氏の存在はクラスでも知られていたが裕奈と仲が良い運動部メンバーですらレントに会ったことがないのだ。

2 - Aで裕奈本人以外に誰も顔を知らない裕奈の彼氏。その謎の存在は和美のジャーナリスト魂や年頃の女の子たちの好奇心を見事に刺激したのだ。

「しっ、明石が止まったよ」

すると裕奈の姿を観察していたハルナが和美と明日菜に声をかける。その方向を見ると裕奈が麻帆良の世界樹の下で時計を気にしながらレントを待っていた。

それを見た和美たちは再び物陰に隠れながら様子を窺う。その光景は文化祭で賑わっていてなお目立っていた。

「でもさ、本当にこんなことしていいのかな？」

先程の明日菜のようにアキラが疑問を口にする。アキラ自身も裕奈が付き合っている彼氏に興味はあるがやはり若干の罪悪感があった。

「えー、だって気になるじゃん。アキラだってゆーながどんな人と付き合ってるか気になるでしょ？」

アキラの言葉にまき絵が笑顔で答える。

「せやけどホンマどんな人なんやろな〜ゆーなの彼氏って?」

木乃香も裕奈の様子を見ながらワクワクしている。すると……

「裕奈!待ったか?」

「ちょ、誰か来たよ!」

裕奈を呼ぶ声にが聞こえ、全員が声のした方を見る。そこには青い髪少年が裕奈に近付いていた。言うまでもない、レントである。

「え!もしかして外人?留学生?」

「カッコいいな〜」

レントの容姿を見て和美たちはワイワイと疑問や感想を口にする。

「私も今来たところだよ」

「んじゃ行くつぜ」

「お〜う!」

なにやら王道な受け答えである。レントは裕奈に笑顔を向けながら手を取って歩き始める。

「あ、移動したよ!」

「ほな追っえ!」

移動した2人を見て和美たちも後を追っていく。

その頃、レントたちは……

「裕奈、気付いてるか？」

「あゝ、つけられてるにやゝ」

レントの問いかけに裕奈は苦笑い交じりに答える。今まで散々エヴァンジェリンから修業を受けていた裕奈には気配を読むのは簡単だった。

「多分朝倉たちだね。前からレントのこと知りたがってたし……」

「まあ、魔法関係者じゃなきゃ好きにさせといていいけどな。って  
いうかなんで教えてなかったんだ？」

「んゝ、なんかこっ恥ずかしくて……」

ほんのりと頬を染めながら裕奈は頬を搔く。

「んだよ、付き合ってもう1年は経つぜ？親父さんにも挨拶済ませ

てんだし」

微妙に呆れながらレントは溜息を吐く。

「で、どうする？撒くか？それとも……」

レントは裕奈の手を放すと肩に手を回して抱き寄せる。

「このまま見せつけるか？」

悪戯っぽく笑うレント。裕奈の顔は真っ赤だ。

「うっっん……撒こう／＼」

裕奈は顔を赤くしながらも結構早く決断した。結局ここで撒こうが見せつけようが後々和美たちに問い詰められるのは目に見えている。ならば撒いて2人でのんびりしようと思えば裕奈は考えた。

一方、レントと裕奈の様子を観察していた和美たちは裕奈の隣を歩くレントをしげしげと観察している。和美などは仲良く歩く2人を写真に収めたりしている。

「いや、明石の彼氏があんなにカッコいいとは驚きだね」

「ホントだね、どこの国の人かな？」

和美はまだ写真を撮っており、他の面々は次々に疑問を口にしていく。

「あれって男子中等部の人かな？」

「確かそうだよ。裕奈が前に言ってたから」

美砂の疑問にアキラが答える。一応レントの年ぐらいは裕奈から聞いていたのだった。

「結構好みかも……」

「お、くぎみー駄目だよ？人の彼氏に手出しちゃ」

「そんなんわかってるわよ！ってゆーかくぎみー言うな！」

レントの姿に円がポロっと口にしてしまい、それを聞いた桜子が円をからかう。そんな感じで2人を見守っていた和美たちだったがレントが驚きの行動に出た。

「……おおー！」「」

何人が驚きの声を上げる。レントが裕奈の肩に手を回し、抱き寄せたのだ。その行動に色恋大好きの子供中学生たちはさらに2人を凝視する。最初は止めるような口調だった明日菜やアキラも食い入

るようになっている。

しかし本当の驚きはここからだ。レントが裕奈をお姫様抱っこして走り出したのだ。

「ああ!？」

「気付かれたか!？」

その行動に和美たちは必死に追おうとするが流石にレントに追いつけるはずがない。結局しばらくして2人を見失ってしまうのだった。

「っと、撒いたな？」

レントは和美たちを撒いたのを確認するとお姫様抱っこしていた裕奈を降ろす。

「もお、いきなりお姫様抱っこするから恥ずかしかったよ／＼」

そうは言う裕奈だが表情は満更でもなさそうだった。

「しょうがねえだろ？ 確実に撒くにはこれが1番速いんだから」

確かにレントの言う通りである。レントの身体能力は最速の英霊であるランサーと同等。人間に追いつけるレベルではない。一般人である彼女たちにすれば尚更だ。

「さて、じゃあデート再開と言うことじゃ？」

「うん めいっぱい楽しむぞ〜！」

裕奈は笑顔でレントの腕に抱きつく。そして2人は文化祭の屋台やら出し物を楽しみ始めた。

それから1時間ほど、いろんな屋台で食べ物食べていたレントと裕奈。そこに何人かの男子中等部の生徒がやってくる。

「お、レントじゃん」

「ん？ おお、お前らか」

それはレントの男子中等部でのクラスメイト達だった。レントを見つけて笑顔だったクラスメイト達だがレントの横にいる裕奈の姿に

顔から笑顔が消える。

「……なに、お前……その子がいつも弁当作ってくれる彼女？」

「ああ、いい女だろ？」

「ちょ、レント！／＼／＼／＼」

レントはクラスメイト達に見せびらかすように裕奈を抱き寄せる。その行動に裕奈は顔を赤くし、クラスメイト達の顔に怒りで血管が浮かび上がる。

「……このリア充がああああああ！！！！」「」「」

クラスメイト達はレントに怒りをぶつけようと追いかけ始め、レントは再び裕奈をお姫様抱っこして逃げ始める。

「んだよ、お前らだって彼女作ればいいだろ？」

そうは言うレントだがその表情はどこか楽しんでいる。クラスメイト達をからかって遊んでいるのだ。

「うるせえ！出会いがないんだよ！」

「そもそも男子校で出会う機会なんざ多いわけないだろ！」

確かに麻帆良は中学から男子中等部と女子中等部に分かれていて部活などでもない限り出会いは少ない。そのため、男子中等部では彼女持ちはそれほど多くなかったりする。

「あ！レント先輩！」

「レントくん！」

「おう！」

クラスメイト達から逃げていると途中の道で女子中等部の生徒たちからレントを呼ぶ声上がる。その女子たちの声にお姫様抱っこされている裕奈の表情が黒くなる。

「ねえ、レント先輩が抱えてたのって彼女さんかな？」

「え、私狙ってたのに」

しかもそういった声が僅かに裕奈の耳に届くものだからさらに黒くなって行く。

「はははは…」

腕の中で黒い笑顔を浮かべている裕奈に流石のレントも苦笑いするしかなかった。

数時間後、もう日も暮れた麻帆良でレントは高台から裕奈と共に夜景を見ていた。2人を追っていたレントのクラスメイト達は少し前に撒いた。しかし数時間もレントを追い掛け回すとは嫉妬の力は恐ろしいものである。

「レ、ン、ト~~~~~? さっきの子たちはなんなのかにや~~~~~?」

降ろされた裕奈は先程レントに声をかけていた女子生徒たちのことをレントに問い詰める。口は笑っているが目は一切笑っていないかった。

「あゝ、あれだ。うちのクラスの奴に何度か部活の助っ人に出てほしいって頼まれてな。そんときの部活のマネージャーとか部員とかだよ」

運動能力の高いレントは何度か友人から部活の助っ人を頼まれたことがあり、その際に活躍してレントのファンになった子は結構いた。偶然にも2・Aのメンバーは知らなかったが女子中等部の間では結構有名である。

実は他にもガラの悪い連中に絡まれていたところを助けたりしていたのだがレント本人はそこまで事細かく覚えてはいない。

「ぶ~~~~~ん」

「お、なんだ？妬いてんのか？」

裕奈の反応にレントはニヤニヤしながら顔を覗き込む。

「別に、レントは女の子にモテモテでいいにゃあ」

そういう態度がすでにヤキモチを妬いてるようにはしか見えなかった。

「安心しろって、俺が好きなのはお前だからよ」

レントは膨れっ面をしている裕奈を抱き寄せる。

「むう~~~~~、レントのバカ」

抱き寄せられた裕奈はそのままレントにキスをする。互いの舌がするりと絡み合い、2人の唾液が互いの口の中を行きかう。

それからしばらくしてどちらともなく唇が離れる。2人の唇の間には名残惜しそうに銀色の糸ができ、それがぶつりと切れる。

「…レント、今日泊り行ってもいいにゃあ？」

「駄目だ」

裕奈の問いかけにレントは即答する。その言葉に裕奈は不満気な顔になる。

「なんでね~~~~？」

「あのなあ、俺は親父さんに『清い交際を』って言われてんだぞ？」  
実際のところ、裕奈はエヴァンジェリンの魔法球の中で修業をしているからか原作よりも身体的な成長が早く、すでに中学生とは思えないスタイルになってきていた。主に胸が……

そんな裕奈と自分の部屋で2人つきりになったら正直な話、自分の欲望を自制する自信がなかったのである。

「もうしょうがないじゃあ」

裕奈も『そういうこと』には興味津々だった。もちろんそれはレントもだがあの父親の重圧には少々抗い難いものを覚えていた。

こうしてレントと裕奈の中学2年の文化祭は終わりを告げ、そしてもう少しで原作に突入するのだった。

ちなみにその後……

「さあ明石！あのイケメンのことを吐いて貰うよ！」

「うう、しょうがないにゃあ」

和美たちに尋問され、見られたからには仕方ないと白状する裕奈の姿があった。

## 第12話 赤枝からやって来た者たち（前書き）

お待たせしました、更新です。

実はエヴァの魔力は呪いではなく学園の結界によるものだと言ったことをすっかり忘れていたので少し以前の話を修正しました。

そして今回は赤枝の騎士団のメンバーが3名登場します。ちなみに本小説の赤枝の騎士団の構成メンバーは他の漫画のメンバーだったりします。

人選は個人的に好きなキャラだけで固められていますが……あとまた少し原作改変があります。

そして次回はついに原作に入ります。

感想お待ちしています。もし良かったら後書きも読んでみてください。い。

## 第12話 赤枝からやって来た者たち

麻帆良祭から数ヶ月。麻帆良には3つの人影が姿を現していた。3人ともレントが持っているものと同じ認識疎外の術式が組み込まれたローブを着ており、その効果で麻帆良の結界に察知されることがなくその敷地内に侵入した。

「ここが…麻帆良…ですか…」

「……………」

「中々良いところですね」

麻帆良に侵入した3人は人気のないところに隠れ、ローブを脱ぎさる。

「しかし…思いのほか簡単に侵入できましたね」

そのローブの下にあったのは白い帽子に白いコート、白いスーツを着た黒髪釣り目の若い男性。

「それだけこのローブの効果が強力なのです」

次に茶色いコートを着た目がパツチリと開いた無表情の壮年の男性。

「けれど…侵入した後に察知されることはないのですか？」

そして最後に白い髪に顔立ちの整った無表情の幼い少女である。

「大丈夫ですよ。私の見立てではここの結界は外部からの侵入には敏感ですが内部に入ってしまったらこちらが行動を起こさない限り察知されることはないでしょう」

少女の疑問に壮年の男性が答える。同じような無表情の2人だが少女は顔立ちが整っているのに対し、男性の方はそうでもない。言っ  
てしまえばオッサンである。

「さて、お喋りはここまでにして…行きましようか？ 闇の福音の居場所…」

白いスーツの男性がそう言うところ人はその場を後にし、麻帆良の街の雑踏の中に紛れ込んでいった。

その頃、エヴァンジェリンのログハウスにはいつものようにレント、裕奈、エヴァンジェリン、茶々丸、そして茶々丸と同じもう1人の従者である人形『チャチャゼロ』の姿があった。

「ええい、レント！ 赤枝の連中はまだ来ないのか!？」

「落ち着けて、もうすぐ来るはずなんだからよ」

その中でエヴァンジェリンは非常に苛立ちながら家の中を行ったり来たりしていた。事の経緯は簡単である。

レントと初めて出会ったとき、エヴァンジェリンに掛けられていた呪いはレントが持参した赤枝の騎士団に所属するマッドサイエンティストが作ったクソ不味い薬のおかげで解くことができた。もつとも、その後数日間エヴァンジェリンはあまりの薬の不味さに寝込んでいたが。

しかし、呪いは解くことができたものの魔力が戻らなかったのである。当初はエヴァンジェリンも呪いの影響で魔力切れの状態になっており、時間が経てば魔力が回復すると考えていた。にもかかわらず、待てども待てども魔力は戻らない。もしかや呪いが解けていないのではと言う考えに至り、万一学園に察知されないようにレントが持っている認識疎外の術式が組み込まれたローブを纏って学園の敷地から出てみることにしたのだ。

結果は成功。無事に学園の敷地内から出ることができ、呪いは完全に解けていることは実証された。呪いが解けていることが確定したときのエヴァンジェリンは嬉しそうにクルクル回り、その光景を茶々丸が録画するというカオスだったがそれは置いて……さらに学園の敷地から出たと勝手に魔力が戻ったのである。

さすがにエヴァンジェリンも魔力がなくなっているのは呪いは関係ないということに気付いた（ちなみにレントはほとんど原作知識を忘れていたので本人も忘れていた）。そこで可能性があるのは麻帆良学園を覆っている結果なのだが……この場にいるメンバーでレントやエヴァンジェリンは結果は専門外。裕奈も戦闘術は向上しているそれ以外ができるはずもなく。どうやっても学園側に知られ、厄介ことになりそうだった。

そこでレントは魔法世界にいる赤枝の騎士団に連絡を取り、結界の専門家を呼ぶことにした。赤枝の騎士団の戦闘能力の高さは魔法世界でも広く知られているが実は他にも結界を専門とする魔法使いや魔法薬・魔法具を専門とする者もいる。エヴァンジェリンの呪いを解いた魔法薬やエヴァンジェリンの乗りが解けたことを誤魔化すためのペンダント、レントの認識疎外のローブを作ったのは魔法薬・魔法具の製作を専門とする男である。

「しかし、向こうでも新メンバーがねえ……」

レントは赤枝の騎士団から送られてきた手紙を見る。そこにはレントが麻帆良に入学した後に魔法世界で新メンバーが加入したと書かれていた。『赤枝の騎士団』の団長はレントだが新メンバーの加入はレント不在でも行われる場合がある。条件は一定以上の技量を持つていてメンバーの半分近くが賛成した場合だ。ちなみに技量がまだ低くても入団を希望するものは赤枝の騎士団見習いとして赤枝メンバーに教えを受けたりするものがある。ちなみに裕奈も位置的には見習いである。その新メンバーも結界の専門家の護衛と顔見せを兼ねて、こちらに来るらしい。

コンコン

すると家のドアがノックされる。茶々丸がドアを開けると2人の男性と1人の少女が立っていた。

「はい、どちら様でしよっつ？」

茶々丸がすぐに應對すると白いスーツ姿の男が帽子を脱いで挨拶する。

「失礼、こちらはエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさんのお住まいでよろしいですね？赤枝の騎士団のものです」

「待ちかねたぞ。茶々丸、通せ」

「はい、マスター」

エヴァンジェリンの言葉に従い、茶々丸が3人を居間に案内する。

「よう、久しぶりじゃねえか。元気そうだな？」

「ええ、あなたもお元気そうで何よりです」

居間にいたレントが3人に声をかける。それに対して白いスーツの男性が笑顔で挨拶を返す。

「まったく、あなたもお変わりがないようで私も安心しました」

次いで、茶色いコートを着た壮年の男性がレントに挨拶をする。

「おい、レント。再会を喜ぶのは良いがまずは紹介しろ」

「へいへい、このおっさんがエヴァがお待ちかねの結界の専門家の……」

レントが紹介するよりも早く、壮年の男性はエヴァンジェリンの目の前に移動していた。

「武市たけち 変平太へんぺいたと申します。以後お見知りおきを」

武市の手はしっかりとエヴァンジェリンの手を握っていた。

「おい！なんだこの変なのは！？」

「あゝ、武市のおっさんはロリコンでな。でも腕は確かだぜ？」

「ロリコンじゃありません、フェミニストです」

武市は冷静にレントの台詞を修正する。

「んで…こつちが…まあ俺も会うのは初めてなんだが、新入りの…

…（あれ？こいつどっかで見たことあるような……）」

次に紹介するのは白髪の10歳ぐらいの幼い少女。よく見るとその少女にレントは何故か見覚えがあった。

「セイス・アーウェンクルスです」

無表情のまま、セイスと名乗った少女は自己紹介をする。

「……………」

どうやら何かしら思い出したらしく、レントはセイスに視線を向けていた。

「…んび、こつちが……」

最後に白いスーツの男性への紹介となる。男性は帽子を脱ぐと礼儀正しくお辞儀をする。

「初めまして…ゾルフ・J・キンブリーと申します。よろしく」

お辞儀をしたキンブリーにエヴァンジェリンは目を見開いて驚く。

「…ほう…裏の世界でも有名な『爆弾狂』のキンブリーか。貴様の名は私も聞いていたぞ？まさか『赤枝の騎士団』に所属していたとは知らなかったが…」

「まあ、私もレントがこの麻帆良学園に来る少し前に入ったものでして…あまりそこまで知られてはいませんよ」

どうやらエヴァンジェリンもキンブリーのことは知っていたらしい。互いに観察するように視線を交わしている。

「…ふん。まあいい…ところでレント、本当に大丈夫なんだろうな？私にはこいつが麻帆良の結界をどうにかできるようには見えな  
いんだが？」

エヴァンジェリンは訝しげな視線を武市に向ける。しかしレントは笑顔で答えた。

「心配いらねえよ。武市は戦闘力はアホみたいに低いが結界関係ならこいつに勝てる奴はいねえよ」

「勿論ですよ」

レントの言葉に武市は胸を張る。

「すでにここに来る間にこの麻帆良学園を覆っている結界の解析はある程度終わらせました」

「なに!？」

エヴァンジェリンはそれを聞いて驚愕した。武市たちは今日麻帆良に来たばかり。しかも来てすぐにエヴァンジェリンのログハウスに向かってきたのだが、その僅かな時間で武市は麻帆良の結界の解析の大部分を終わらせていたのだ。

「結論から申しませう。麻帆良を覆う結界がエヴァンジェリンさんに影響を与えているかどうかと言えば答えはその通りです。麻帆良の結界は外からの侵入者の探知能力とは別にエヴァンジェリンさんの魔力を抑える結界が存在しています」

「なるほど…まさか10年以上気付けなかったとはな」

武市の説明を聞いてエヴァンジェリンは忌々しげに顔を顰める。

「安心してください。この程度の結界ならば麻帆良側に感知されずに術式を書き換えるなど造作もないことです」

一切表情を変えずに武市はエヴァンジェリンに説明を続ける。そんな武市にエヴァンジェリンは流石に驚いていた。

「…なるほど、レントが言うだけはあるということか…で、術式の書き換えはどれくらいかかる?」

「解析が完全に終わったらさすがにでもやりましょう。たとえ敵であ

ろつとも女性に優しく接するのが『フェミ道』というもの。それが味方ならばなおのことです」

自称フェミニストの武市は無表情のまま返事を返す。そしてそのまま武市は麻帆良の結界の完全な解析と術式の改竄のための作業を本格的に始めた。

「なあ、キンブリー。ギルドの方はどうだい？ 新入りが入った他になんか変わったことはあったかい？」

「いえ、いつも通りですよ。掟を破らない範囲でみなさん好きにやっています」

キンブリーの言う『掟』……それは以前レントがエヴァンジェリンに言った赤枝唯一の掟である『仲間を裏切らない』というものだ。一応、赤枝内にこの掟を破った者は今のところ1人もいない。

「ああ、それとあなたに恋人ができたことでみなさんかなり興味津々のようでしたよ？ 今回の武市さんの護衛の件もいろいろと騒ぎましたしね」

実は今回の武市が麻帆良に来る際、結界に関しての能力はバグのくせに戦闘力はカスの武市の護衛として赤枝の武闘派たちはレントの恋人見たさに誰が行くか揉めたのである。まずレント不在時にメンバーになったセイスの顔見せと言うことでセイスの同行はほとんど拍子に決定した。

そしてあまり大人数で行くのも問題になるので護衛はあと1人と言うことで赤枝武闘派メンバー内でのガチンコバトルが勃発。結果的にキンブリーが勝者となり、麻帆良に来たわけである。

「相変わらずだな…」

レントはため息を吐きながらもどこか嬉しそうに笑い、セイスに話しかけている裕奈を見る。裕奈は自分と同年代のセイスと仲良くなるうと頑張っており、セイスも一応最低限の受け答えはしていた。

「ふ、ふはははははははははは！！！！！！」

するとログハウス内にエヴァンジェリンの笑い声が木霊する。どうやら武市の作業が終わり、麻帆良の結界で封印されていた魔力が戻ったのだろう。認識疎外の効果があるペンダントのおかげで麻帆良側にはバレていないが本人はいたってご満悦だ。それも当然、10年以上もかけられた忌々しい呪いはすでに解かれ、封印されていた魔力も完全に復活したのだから。

「終わりましたよ」

一方、作業を終えた武市は額に僅かに浮いた汗を茶々丸に渡されたタオルで拭いながらレントたちに近付いてくる。

「ご苦労さん。で、どんな感じなんだ？」

レントは武市に現在の結界の状況を訊ねる。

「彼女の魔力を封印していた結界の術式を完全に改竄しました。勿論、外部からの侵入に対する結界の方は弄っていません。それと麻帆良側からは探知できないように結界の術式をカモフラージュして置いたので封印結界が解けたと麻帆良側が感知することはないでしょう」

武市の説明にレントは満足げに頷く。その後、キンブリー、セイス、武市の3人はしばらくの間、麻帆良に滞在することになった。

そして数か月後……イギリスのウェールズから2（・）人の少年が来日することになり、ついに物語は動き出す。

## 第12話 赤枝からやって来た者たち（後書き）

と言うわけで12話をお送りしました。

ちなみにセイスですが…多分気付いてる方は気付いてるかと……セイスはテルティウムがフェイトと名乗っているのと似たようなものです。

まえがきでも書きましたが次回から原作に入ります。オリキャラも出ます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4782p/>

---

魔法先生ネギま～猛犬を継ぐ者～

2011年8月8日18時51分発行